

2017/03/19

SPRING SEMINAR 2017

総評

Table No. 7 ニカン①



杉野谷栞里 (青学 4) / 成松裕斗 (早稲田 4)

CONTENTS

1. Table Members
2. Flow of the Discussion
3. Reasons for Selecting
4. Messages from the Judges

TABLE MEMBERS

井桁(立教 2)、小野(法市 2)、川名(成蹊 2)、上見(慶應 2)、手代木(明学 2)、水出(法市 2)、原(立教 2)、佐藤(フェリス 2)

FLOW OF THE DISCUSSION (文責：成松)

スタートと同時に原と川名が **Narrowing** を読み始め原が譲る形となる。OP には上見、川名、手代木、井桁の 4 人が立候補するが特に混乱が無かったにもかかわらず約 45 分を OP 決めに費やしてしまうこととなった。結果的にコンパリにおける「どのような死が最も深刻か」という論点をアピールした井桁のオピニオンシートが選ばれ議論が進む。尚、今回特筆すべき内容は **Practicability** での上見のアイデアのみであるためこの部分を中心に述べていくこととする。(※ジャッジという性質上、認識にズレがあるかもしれないがご了承いただきたい)

<ASQ ~ Mandate>

特になし。質問が飛び交うが停滞はなく NFC での反論もなかった。

<Practicability>

始めに四人が反論を持っており上見のアイデアから検証していくこととなる。上見のアイデアは **Mandate = invade right** → **A/C** であり結果的にこのアイデアに残りの 1 時間 40 分を使うこととなった。以下まとめごとに詳細を記述していく。

invade right: 臓器移植が強制され「移植したくない」という家族側の意志に反すること(選択権の侵害)

A/C: 今回の Mandate が 1.死刑 2.社会福祉にあてはまらないため憲法違反(このいずれかに当てはまれば権利が侵害されていても例外となるとの Evidence から)

V/P: Real J/G の考えをもとにこのテーブルとして結論を出す

① 前半

検証が始まると原が **talking point** を提示し、井桁や川名が論点を追加したうえで特に異論はなかったため以後これに沿って議論が進む。そして理解するための質問を重ねていくが上見の考えとしては「T/P する前に A/C であるかどうかしっかりと議論すること」が大事であるというものであった。そのために上見は **Evidence** を固めて臨んでいたがテーブルとしてその「コンテンツを話したい」という意図を汲むことができず、「タスクに反する」という理由で流そうと必死になった結果停滞を招くこととなる。

② 後半

停滞後はテーブルメンバー各々が自分の言いたいことを主張した結果なかなか話がまとまらない。ここでの各々の介入は以下のようなものである。

井桁：「これを話すには 100%A/C であると証明する必要がある」との唯一内容に関するダウトや「コンパリで話そう」との S を中心に話の進行を試みている。

川名：ひたすらに対立部分や S のカンファメーションをしており白熱した話を地に足着けようとしている。

小野：論点を明確化するような質問をゆっくりとした語り口で投げかけている。

手代木：タスクで流すことを試みたり井桁などの S をサポートしている。

上見：相手の介入に対して理解させようとアイデアの説明に徹している。

原：介入は少ないが自分で引いた **talking point** の確認や井桁のサポートをしている。

水出：介入は少ないがカンファメーションや質問で論点を整理しようとしている。

佐藤：介入は少ないが今話していることを根本から理解しようとスタートの確認している。

③ 収束

最終的に小野や川名のサポートもあり、井桁の「コンパリで話そう」との S に上見が **Compromise** をする形で検証が終了する。そして残り時間わずかなところで次に佐藤が反論を提示し一つ質問を受け付けたところでディスカッションが終了した。

「アイデア」について 文字だけ見れば同じアイデアでもなぜケース通りに流すことができないのでしょうか。それは当然、提示者の「意思」が含まれるからです。また、オピシ中の反論はある種「こうこういう理由があるからこの論点を深めるべきだ」という「提案」でもあります。だからこそ提示者の「意思」に沿わず単に「タスクに反するから」と言うだけではかえって停滞を招いてしまいます(※これが必ずしも悪いと言っているのではないです)。ディスカッションって「対話」であるとよく耳にしますよね。もし日本語で同じ議論をしていたとしたらそこではどのような「対話」をしますか？それを考えれば今回とは異なる、より自然なトリートをするヒントとなるかもしれません。また、反論が論点の「提案」であるとしたら数ある候補からナローで OP が選ばれた理由とも言える「コンパリの論点」も一つの「提案」ですね(今回であれば「どの『死』が最も深刻か」)。するとマクロに見れば反論が出た時点で「論点の提案」が2つあることとなります。このように考えれば3時間の中でより CCL 意識を伴うマクロな視点での介入も見えてくるのではないのでしょうか。

REASONS FOR SELECTING (文責：杉野谷)

1位 井桁 (立教2)

OPとしてテーブルを前に進めようとする意識があり、コンスタントな介入をしていたため1位とした。特に上見の **argument** に対しては上見のスタンス(議論したい、反論切りたい)を最も理解しようとしていた。その点は柔軟であったが、一方で **suggestion** が飛び交う場面では川名に任せてしまう場面が見えたのは惜しい点である。アッセンで上を目指すならもっとテーブルを味方につけることを意識してほしい。またニカンには自信のあるプレゼンをしていて、普段先輩やいかつい同期がいると弱気になっている印象があるのでもっと逞しくなってほしい。

2位 川名 (成蹊2)

話が停滞したとき、テーブルの理解度が低いとき、率先してカンファメを行い、例などを用いてテーブルに貢献しようとしていた。そしてコンスタントな介入があった点で2位とした。ただ、自分から選択肢をあまり出せていなかったことと自分の意見そのものをテーブルに提示しきれていなかったことが1位との違いである。だが、あまり恵まれているとは言えない環境の中、ここまで **discussion** に真摯に向き合い、努力している姿は素直に尊敬する。これからも多くの先輩を頼り頑張してほしい。

※1, 2位以降はほとんど差がなく1つの介入で順位が大きく変わることを意識してほしい。

3位 小野 (法市2)

一番テーブルのために今必要なものをカンファメできていた。特に上見の **argument** においては **Compromise** しようとした際にその結果どうなるのか、テーブルが見えていなかった先の議論を提示していた。ただ介入量が少なかったのと、議論の中心のなる機会がすくなくかったためこの結果となった。二年生でこれだけ丁寧にトリートできる人は少ないのもっと介入して先に進める意識をテーブルに提示してほしい。アッセンではぜひ挽回してほしい。

4位 手代木 (明学2)

積極的にオピメのスタンスを確認していた。とくに井桁の **procedure** をいち早く理解し、サポートする姿勢はとても評価すべき点であったといえる。ただサポートで終わってしまったため、この順位となった。今後1位になるためにはまずテーブルで自分の話を一回で理解されるようなプレゼンとテーブルのためのカンファメができるようになれば今後さらに活躍することができると思う。ぜひともアッセンではMESAの一員として頑張してほしい。

5位 上見 (慶應2)

唯一自分の意見をテーブルに提示し、議論しようとしている存在だった。ただ、今回のテーブルではそのアイデアに結論がでなかったためこの順位となった。上見の意見は PDD そのものの矛盾点であったり、今のディス界の姿勢そのものへの疑問につながっていたりしていたと思う。反論力や理解力は群を抜いていた。だからこそアッセンや来年、ディス界を牽引する存在になってほしいと我々は感じた。そのためにある程度テーブルのために妥協する姿勢を身に付けてほしい。

6位 原 (立教2)

Talking point を即座に出し、テーブルに提示する姿勢は良かった。しかしその後のコンスタントな介入がないせいでその t/p の存在意義がなくなってしまっていた。そこがもったいないと感じた。2 カンテーブルは例年人の話を聞かず、殺伐とした雰囲気になることがあるが、原はテーブルにおいて常に元気があったのでこのテーブルが終始なごやかな空気はあったと思う。持ち前の明るさとためらわずに介入する姿勢を活かして今後もテーブルを楽しませてほしい。

7位 水出 (法市2)

定期的にオピメの発言を理解しようとしたり、テーブルで混乱している言葉などの確認を行っていたりした。しかし、その行為が後につながるケースが低く、自分の理解で終わることが多かったためこの順位となった。今回のニカンに限らず、テーブルの雰囲気やハンドリングを積極的にする人に譲ってしまいがちではあるが、そのトリート力やチャートのうまさは劣るものではないのもっと自信をもって介入してほしい。そのためにインナーでもっと相手やパンツを見るプレパをするとよいと感じた。

8位 佐藤 (フェリス2)

定期的に goal や effect などのオピメのスタンスを理解しようとしていた。しかし水出と同じく自分の理解で終わってしまった部分が大きかった。ただ普段あまりニカンをくむ機会がない中でこのテーブルまでこられたこと、さらに唯一の女子大として努力してきた姿は我々マスターとして誇りに思っている。ここで満足せず、自分はテーブルでどんな役割ができるのか、どんな役割が今必要なのかを理解し、積極的なパフォーマンスをしてほしい。アッセンもあるのでさらなる成長を期待している。

MESSAGES FROM THE JUDGES

- ☆ お疲れ様でした。このテーブルは終始なごやかでした。そこはいいなと思った反面、コンクル意識はあまりないなと思いました。私も昔ある先輩に言われたのですが「目先のことにとられすぎると後に起こる面白い議論にたどりつけない」というのがこのテーブルにも言えたと思います。またどの子もやはり上手いと思うのでぜひ同期内で切磋琢磨して頑張ってください。素直に楽しそうでよかったです。先輩をたくさん使いまくってこれからも頑張ってください(*^^*) 杉野谷
- ☆ お疲れ〜。僕自身ニカンには行っていないので今回ジャッジとしてニカンを見ることができとても新鮮でした！コメントなんか上からでごめんね(笑)さて、今回の春セミはいかがだったでしょうか。各々今回の春セミの結果を受けて「やってきたことが出せて良かった」「自分はこんなもんじゃない」「プレパもっと頑張れば良かった」などいろいろなことを考えたかと思います。そして次にはアッセンがあり、さらに二年生にはまだ来年があります。もし春セミで感じたことを受けまた頑張ろうと思ったのなら、大事なことは「次に向けまたいつプレパを本気で再開できるか」ということに尽きるのではないのでしょうか。それぞれの目標に向けて、引退後振り返った時に「良かった」と思えるような一歩を刻んでいってください。応援しています！ 成松

以上です。本当にお疲れさまでした！

